「勝ちたい」と「勝ち切る」との対局意識の違い

基本理論：「勝ち切る」という継続した意識によって、着手効率の本質が変わる

越田　正常｜Koshida Masatsune

㈲日本囲碁ソフト代表

■大阪府出身。信州大学卒。囲碁講師（アマ６段）。囲碁関西マンガ「岡目八目」の構成企画、学習ソフト「プロの碁」シリーズ、「死活アタック」、「布石定石AI」、対局ソフト「本因坊」、「囲碁初段」、「ミニ碁」、「すぐ碁が打てる」の企画・開発に携わる。インターネット上で、リアル対局場、ボード対局場を運営。著書に『パソコン＆インターネット囲碁入門』（新紀元社）、『碁の方程式「基礎編」』（竜王文庫）。E-mail：igosoft@sun-inet.or.jp

はじめに

これまで13回にわたって囲碁の理論についてお話ししてきました。今回は最終の総まとめとして、囲碁学習における問題点を考察しながら、「勝ちたい」と「勝ち切る」との対局意識の違いについて、まとめたいと思います。

1. 現在の囲碁教育の問題点

⑴　勝敗規定と着手効率の隔たり

囲碁の勝敗ルールでは、囲碁とは「地の大きさを競う」ゲームになるのですが、一般的に地を囲う手は、悪手になります。また、「石が取れる」ルールはあるのですが、「石を取ろうとすると、反対に取られる」というゲーム特性があります。このため、勝敗ルールとして最初に教えられた「地の大きさを競う」ということと、実際に効率良く打つための対局意識に、大きな隔たりが存在するゲーム構造になっていることがわかります。

このような価値感の大きな隔たりがあるにもかかわらず、着手目的として、

①地を囲う手は良い手でない

②石を取ろうとする手は良い手でない

という基本的な価値感についての説明が、囲碁の本では、ほとんどなされていません。このため、囲碁の学習を始めたスタート時点から、間違った価値感を持ちながら学習が進むことになり、このことが途中で上達できなくなる大きな原因になっています。

⑵　子供の教育と大人の教育の違い

子供に囲碁を教える場合は、「石取りゲーム」や「詰碁パズル」として碁を楽しませながら上達させるという有効な方法があります。しかし、この「詰碁パズル」を解く方法は、大人の心情としては満足できないものがあります。大人の場合には、入門者であっても「本格的な碁の本質を知りたい」という意識が当初からあります。このため、「地を囲う」

「石を取る」というような基本的な価値感への疑問が解決できないと、「そんなに難しいゲームなら、碁は私には向いていない」ということになり、囲碁から離れるという結果になります。

⑶　「失敗しない」という学習方法

囲碁は、どこにでも自由に着手できるゲームであるため、**非常に変化が多く、失敗が多いゲームである**という特性があります。また、「地を囲う」「石を取る」などの目的が、**一手では達成できない**という特性もあります。このため、勝負の敗因の第一位が、「知識不足」や「読みの能力不足」による「失敗」になっています。特に「死活」での失敗は、勝負の致命傷になるため、相手のミスに対して「石を取る」ことを中心に教える本が数多くあります。この「石を取る」学習が、囲碁の本質をわかり難くさせ、読みの力を向上させる点でも弊害をもたらす原因になります。

⑷　間違った読み筋の練習

死活での正しい読み筋は、「殺す問題」ではなく「生きる問題」を数多く練習することで身につきます。このため、「殺す問題」の練習を多くすると、殺す手順に死活の読み筋があるという錯覚が与えられることになります。本来、「殺す問題」を解く学習目的は、「相手に手抜きさせない」という、非常に高度なテクニックを得ることを目的にしています。このため手順も難しく、生きる手より活用度も低く、また、「実戦では殺せない」という現実があります。さらに、この殺すという意識が、対局意識へも悪い影響を与えます。

⑸　石が取られる恐怖心

「石を取る」問題を数多く練習することで、上手と対局する場合に「自分の石が取られる」という恐怖心を助長させることになります。特に置碁では、「序盤は積極的に攻める」ことが重要であり、「攻めながら守る」ということが基本姿勢であるにもかかわらず、石が取られることを恐れるあまり、「守ってから攻める」という間違った癖が身につくことになります。さらに、下手との対局の場合には正反対に、「無理手を連発して殺そうとする」手を打つことになります。

⑹　打ち込みを恐れて地を囲う

上級者になると、さすがに石が取られる恐怖心は減ってくるのですが、そのかわり、「相手からの打ち込みで、地にならない」という意識を持つようになります。これも本来は「打ち込ませて攻める」という基本の考え方があるのですが、「打ち込まれないように、地を守る」という意識が生まれ、それが悪い癖になります。

⑺　プロ対局を鑑賞できない

テレビ放映での「プロ同士の対局」では、練習問題で解くような「相手の石を取る」「地を囲う」などの場面がほとんどないため、初段程度の棋力になっても「プロの対局のすばらしさが理解できない」という事態が生まれます。つまり「勝ち切る」という意識を教えられていないため、「高段者の囲碁を見ても、楽しむことができない」という弊害が生まれることになります。